



Rendez-vous
sur la
terrasse du café

逢
逢

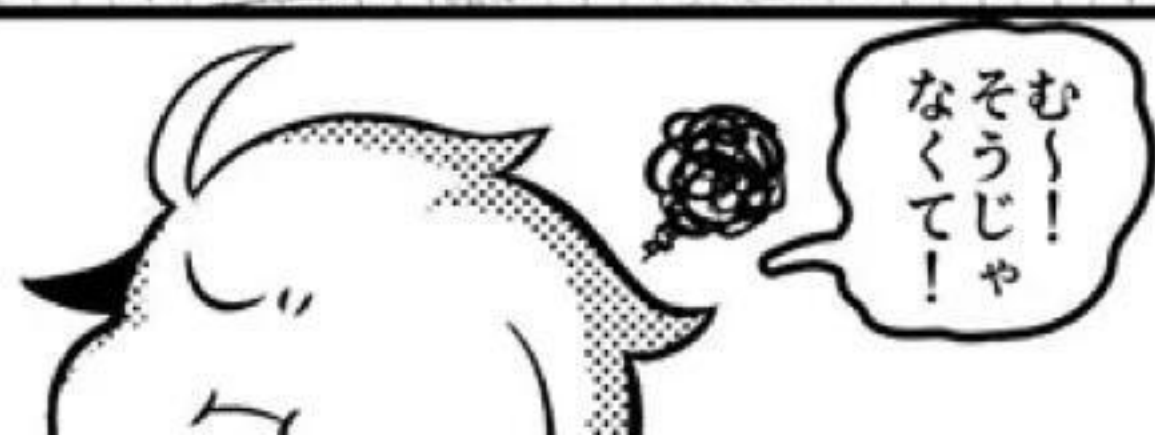
エ
エ
ス
で

mimizuno
presents

PaletteParade
unofficial
fanbook

本文WEB公開版

Gauguin / van Gogh
R-18





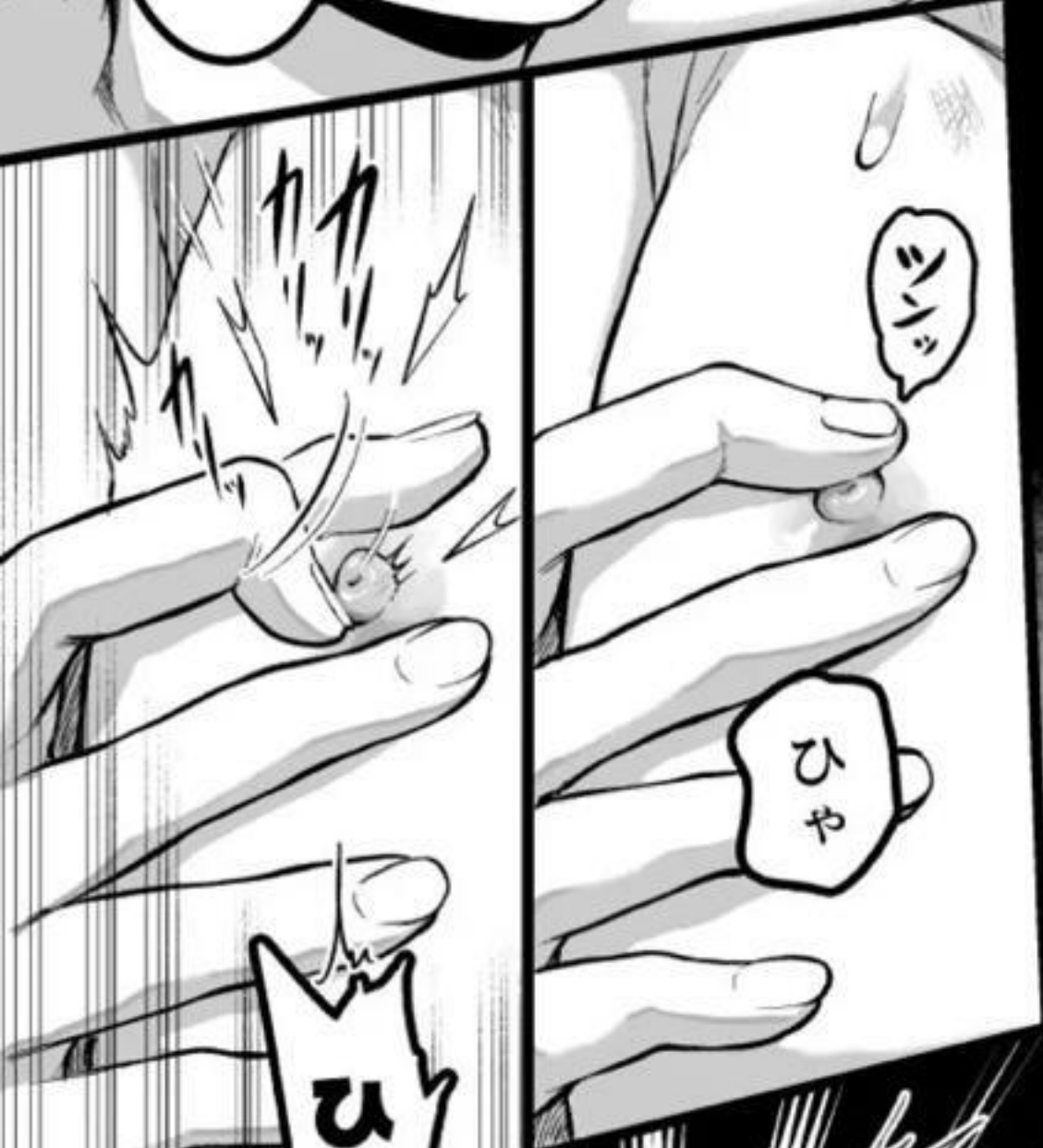












んあ♡

やっ♡



はあ…っ



声へんな
出ちゃ…っ



変じゃない
もっと聞かせて



きもち
いいか？

うっ…っ！



ふにゃふにゃ♡♡♡

これは？



言って

きもちいっ
きもちっ！







どうだ?

指
挿れるぞ

…っ
な、なんか
ちよっと

きもちわるい、
かも

うあぁ

あ、あ

う、そこ、
なんか、
や...

ここか?

あぁあ









ん、
可愛い

あ

う

や、
や

あ♡
!?

♡♡♡
うわっ

♡♡♡
うわっ

ん♡
♡♡♡









うあああつ♡♡

しゅわん!?

んっ

はあああ♡♡



ツや?!
みみだえ、

やあ、あつ

ざら



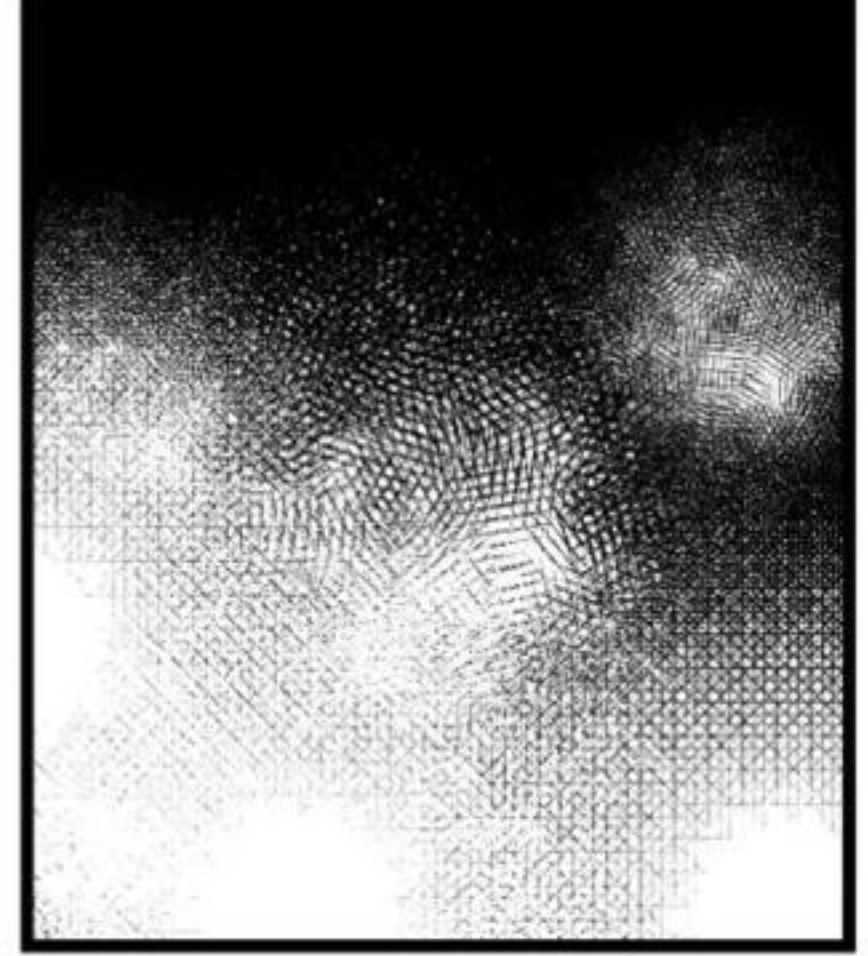
あああああ♡♡

ふあああ♡♡

あああああ









俺の流す音楽
うるさいって
言ってたけど
お前らも大概だぞ

ドラクロワ



(ぽんさんの性事情、他の芸術家、
レベル)

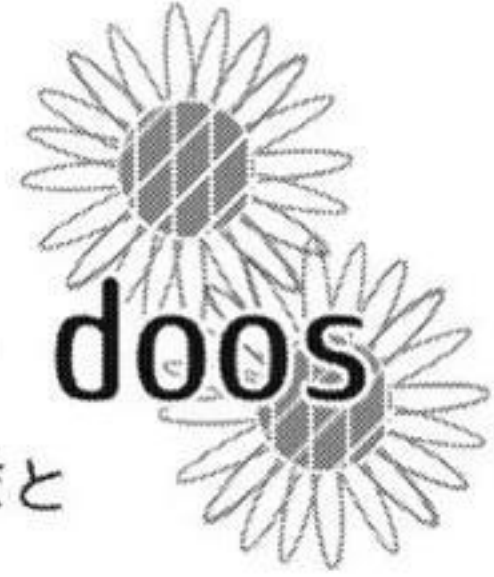


ここがゲストルームです。
全部最高な人間類みてー
ア〜…神よ…



Geheime donkere doos

@sushiwoyokose/ きらまちやまと



「ゴーギャン……。今夜すこし、話したいことがあるんだ」
「え……。あ、ああ」

いたく真剣な眼差し。のゴッホに呼び止められたのは、なんてことのない昼下がりのこと。窓ガラスから柔らかな日差しが差し込み、とても穏やかな午後だった。特に忙しくもないなら散歩をするのもいいかもしれない……。なんて能天気なことを考えていた俺は、咄嗟の申し出にろくな返事をする事ができず曖昧な頷きを返すばかりだった。これから出かけてくると手を振るゴッホを見送りしばらくした今も、呼び止められたまま廊下にぽつんと立ち尽くしている。

（ゴッホがあんなに真剣な目をしていたということは、よほど大切な話なんだろう。だが心当たりが全くないぞ？ 最近は特に思い詰めるような依頼は無かったし、俺も調子が良いし）ぐるぐると考えてみるが、まるで内容の想像がつかない。そうなると、思考はどんどん悪い方へ流れていく。

（まさか……。俺との付き合いをやめたい、とか？）

俺とゴッホは、恋人として付き合っている仲だ。周囲に大っぴらな報告はしていないものの、品の無い言い方をする事することはすべてしている。だが俺達は、この幸せな関係に至るまでの道筋で、お互いの心を嫌と言うほど傷つけてしまっていた。言葉足らずな俺達はとても不器用で、素直に恋を紡ぐことすらできない。

長らく止まった歩みを再び動かし始めた時、俺達はある約束を結んだ。「嫌なこと、思うこと、抱いた感情はお互いきちんと言葉にして伝えよう」という子供じみたものだが、もう二度とお互いを傷つけないために、これは必要なルールだった。

（あれだけ真剣な顔をしていたんだ、有り得るかもしれない）

ゴッホからの話に心当たりがあるとすれば、それしかない。ゴッホは俺に限らず、誰にでも平等に明るく優しい男だ。目的に対して驚くほど情熱的で、誰もが人生のうちで覚えてしまう諦めを跳ねのけるひたむきな姿は、万人の背中を押す勇氣の象徴ともなろう。だからこそ、自然と言う美しくも荒々しい神の気まぐれに耐え抜き、煌々と光る眩しい程の太陽に面と向かって挑んでいくあの花が似合う。ゴッホ自身は謙遜するが、それだけ魅力的な人間なのだ。

(今更……手を、離せるか?)

あの笑顔を独り占めできるとは初めから思っていない。思っていないが、理解と感情は全くの別物だ。人間と言うのは厄介なもので、所在のわからぬ「こころ」というものは酷く扱い難くて適わない。脳では理解し納得していても、黄色い花弁を閉じ込める掌は開くことができなかった。本当に彼を大事に思うのなら、再会と和解を経たあと、友人の続きを歩むべきだった。なのに俺は細い手を引いて、いばらの散らばった愛の道へ引きずり込んでしまった。後悔と満足の入り混じる背徳的な日々は甘美なものだったが、頭の片隅には常に「これでよかったのだろうか」という疑問が付き纏っている。だから俺は、ゴッホがいつでも逃げ出せるようにと子供じみた約束を結んだ。

(……いや。例えそうだったとして、こんな顔をするべきじゃない。俺はちゃんとあいつを応援してやるべきだ。なんでもないように話を聞いてやらないと。俺が約束を結んだのは、なにも言い訳をするためじゃないんだから)

腹の底からの本音を零せば、ゴッホは決して俺を見捨てないという自信があった。狡い自信だ。彼の良心につけこんで、結局は雁字搦めにしている。あの約束も、逃げ道を用意してある

という言い訳のための安心材料だ。逃げないのは彼が俺を好いている証拠だ……、なんて、醜い肯定を抱くための布石である。己の狡賢さにまったく嫌になる。ゴッホの為なら、と覚悟を決めているようにでいて、いざ現実に別れを意識すると動けなくなってしまうのだから、情けないことこの上ない。キリッ、と鋭い痛みが顔が歪みそうになったが、必死で気付かないふりをする。考えたところで、夜にならなければ、ゴッホの言う「話」の正体はわからないのだ。浮かんた思考を最悪の場合と仮定して、なんとか気を前に向ける。

(いつも通りに……過ごそう)

平常心を取り戻そうと深く息を吸う。ともかく俺は、一転してざわめく曇天の心を抱えながら、永遠にも似た夜までの時間を潰さなくてはならない。

(なにかスケッチでもしてこよう……、絵を描いて居れば、きつと無心になれるはずだ)

穏やかな日差しに曇天を誤魔化してもらおうと、俺はスケッチブックを攫うためにずかずかと廊下を歩きだした。



(長かった……、一日が)

余計なことを考えないようにと思っても、無心と言うのは難しいものだ。波立つ集中をコントロールできるのなら、絵描きも苦勞しないだろう。アイデアのためにラフでも貯めておこうと思っただが、持ち出した鉛筆がつづったのはせいぜい小鳥の一匹二匹だ。何時間も座り込んだ成果としては少なすぎる。

(日は十分暮れている。ゴッホは部屋にいるだろうか)

無意識に重くなる足をゆっくりゆっくりと進めていたが、画

材を抱えたクールベや果物を採ってきたと笑うミレーたちとすれ違い、どこを迷ったのか枯葉を沢山つけた北斎を歌川に預けたりなどしているうちに気づけば自室にたどり着いてしまった。

「あ、ゴーギャン！ 丁度良かった！」

「ゴッホ……。お前も今帰ったのか」

深い深呼吸をして、ノックをしようと思いを固めた瞬間、廊下の向こうから明るい声が飛んできた。手に紙袋をいくつも抱えているところを見ると、どこか買い物に行ってきたのだろう。

「うん！ ゴーギャンも出かけてたんだね！ 悪いんだけどドア開けてもらっていいかな？ 両手塞がっちゃってて……」

「ああ、勿論だ」

大荷物のゴッホを先に部屋に入れ、静かにドアを閉める。甲高い音を立てる蝶番に、もう逃げられないぞと言われているような気がした。

「よし、とりあえずベッドの上において……」

「買い出しに行っていたのか？ すごい荷物だな」

「うん！ キュレーターさんと一緒にね。ゴーギャンは？」

「ああ、少しスケッチを……しようと思ったんだが、あまり筆が乗らなくてな」

ゴッホの返事はいたっていつも通りだった。昼間の真剣な眼差しと打って変わった姿に、張り詰めていた緊張感が徐々に削がれていく。最悪を想定してできれば聞きたくないと耳をふさぐ自分と、悪い知らせならとつと聞いて済ませてしまいたいと妙に腹をくくった自分がせめぎ合い、ついにはぼそりと言葉が漏れた。

「あの、ゴッホ。昼間言ってた話って……今、いいか？」

「ああ、そうだね……！ 実は、話って言っても相談に近い

んだけど、ゴーギャンにすごく迷惑をかけてしまうかもしれないくて……」

紙袋を並べていたゴッホが、振り返って眉根を下げた。申し訳なさそうな顔に、ぎゅつと胃が締め付けられる感覚がしたが、続けてくれと頷きを返す。

「あのね、すごく大きい依頼を貰ったんだ」

「依頼……？」

依頼の話が出て来るとは思わず、知らず力んでいた手のひらから力が抜ける。この様子では別れ話ではないかもしれない、と思いつつも、言葉の続きを待つ。

「うん。泊りがけで、別荘地に立ってる邸宅の壁紙を絵で装飾してほしいってお話で……」

「すごいじゃないか。でも相談ってことは、何か心配事があるのか？」

「そうなんだ。実は、その依頼のために……」

「ために……？」

「明日から、そのおうちに泊まりに行かなくちゃいけないんだよ……！」

ふり絞るような声と、真剣な眼差しが俺を射貫いた。そのまゝ、小さい手にガツと勢いよく肩を掴まれる。

「ゴーギャンを置いて、泊まりに行かなきゃいけないんだ！ ゴーギャンは僕がいけないと眠れないのに——！」

「……」

ゴッホの迫真の表情と反比例するように、俺の心で渦巻いていた不安と緊張は全て自然へ還っていった。ひとまず彼との関係にピリオドが打たれてしまうような申し出では無かったことに安堵する。むしろ真逆の、愛ゆえの心配に別の意味で胸が痛

くなつた。

少し前、思い悩むゴッホを励まそうと声をかけた時に、彼の不在を夜更かしの言い訳として使ったことがある。彼が居なければ眠れないというのは嘘でもなんでもないのだが、それは同室の友人兼恋人が、夜な夜な部屋に戻らずアトリエに籠っていると聞き、心配で安眠どころではないという意味合いが強かった。すこしでも休んでほしいが為の言葉だったのだが、ゴッホは思ったよりも数倍真剣に俺の言葉を心に留めておいてくれるようだ。

「つまり……、お前が不在の間、俺が眠れなかったらどうしよう……心配をしてくれているわけか」

「うん。せつかく最近ゴーギャン元氣そうなのに、僕のせいで倒れちゃったらどうしようって思つて……。かといって、せつかく指名してもらった依頼を断ることもできないし、ゴーギャンを連れて行くのも強引すぎるし。色々考えたんだけど、結局いい考えが出てこなかったんだ。どうしたらいいかな……？」

どうしたらもうこうしたらもない。俺のために優しい心配を抱いてくれたという事実だけで、しばらくの間は安眠できそうだな。

「俺なら大丈夫だ。それより、良い依頼が来てよかったな。目一杯楽しんで来い、きつといい仕事になる」

「ゴーギャン……。ありがとう、僕頑張るよ！ でも……本当に大丈夫？ 多分だけれど、一週間は帰ってこれないと思うんだ」

一瞬笑顔とガッツポーズを見せたものの、ゴッホの顔はすぐに心配を浮かべてしまう。子犬のような瞳が心の底から安堵を抱くには、俺の大丈夫は信用に足らないようだ。

「そうだな……」

会話を続けている風を装って、ゴッホが納得しそうな理由を考える。バジールに薬を貰うから、などと言っても逆に不安をかけるだろう。……ゴッホの布団で寝るから、というのはどうだろうか。いや、恋人とは言え流石に不審者がすぎる。

(どうしたものか……。……、ん)

無垢な心配をどうにかして治め、彼を依頼に集中させてやらなくては。真摯に考え込み始めた俺の視線は、ふと机に置かれた一台のカメラに留まった。先日、ミュシャから譲り受けた古いフィルムカメラだ。

(何かを留めておきたいと思うのなら役に立つ、なんて言われて貰ったが……使えるかもしれない。確か、フィルムは部屋撮りに向いた高感度の新商品だと言われたような)

また狡い自分が顔を出す。ゴッホの真剣な心を逆手に取るなど外道極まりないが、目一杯の愛を一手に向けられたいと願うのは男の性と言うものだろう。それに、どちらにせよゴッホが満足しない限り、不安が水を差すことになりかねないのだ。

——据え膳、ということにしてほしい。

「……あそこにカメラがあるだろ」

「え？ あ、ミュシャさんに貰ったって言ってたやつだね？」

「その通りだ。……あれで、ゴッホを撮らせてほしい」

「僕を？」

カメラと俺の睡眠とが結びつかない様子のゴッホは、頭の上に沢山のクエスチョンマークを浮かべている。

「ああ。一週間、俺は写真の現像を試して過ごそうと思う。新しいことを始めると、熱中して余計なことを考えなくなるだろう？ それに、現像には時間がかかるからな。それなりに体力を使うし、暗闇でやるから心も落ち着く。自然と疲れて眠れ

ると思わないか」

「確かに……！ それは名案だねゴーギャン！ あ、でも、熱中し過ぎて逆に眠れなくなったり……」

「それは大丈夫だ。もし連続で徹夜しそうになったら、ミュシャに連行してもらおうように話をつけておく」

「それは心強いかも……。でも、たしかそのフィルムってとてもいいものなんじゃなかったっけ？ 被写体、僕でいいの？」

「お前がいいんだ。俺はまだ写真への知見が浅いから、とっかかりとしてまず一番好きなモチーフから挑みたい。俺はゴッホの顔を描くのが好きだから……カメラでも同じように興味を持って取り組めると思う」

いつの間にか肩からずり落ちていた手をそっと掴み直す。澄んだ瞳がじつとこちらを見つめ、やがて照れくさそうに細められる。

「うん、それでゴーギャンが良く眠れるなら、いくらでも手伝うよ！ って言っても、もう今夜しかないんだけど……」

「明日は朝早いのか？」

「ううん、昼過ぎに出る予定。少し遠いから、移動で一日使うんだ」

「そうか。……準備もあるだろうし、今からすこし時間を貰っていいか？ 夕飯時だし、できるだけ手短に済ませる」

「わかった！」

元気のいい返事を聞き届け、カメラの準備をするからと背を向ける。フィルムの装填にも慣れないので、失敗していなければいいかと思いつつなんとか最初の数枚を巻きあげた。



恥ずかしそうにしているゴッホを幾枚か写真を収め、適当に夕食をとったあと俺達は再び自室にこもっていた。旅の準備を手伝いつつ、画材の貸し借りなどをして、気付けば日付が変わろうというところまで来ている。

（数枚フィルムが余っているな。これは明日にでも別のものを撮るか）

荷づくりついでに拡がってしまった荷物を片付けつつ、冷たい機械を落とさぬように机の真ん中へ寄せる。絵と違い、現像するまでどのような仕上がるかわからないのがじれったい。もしかすれば全く何も写っていないかもしれない、というのはリスキーなものだと思う。ミュシャに言わせると、その刹那感がいらいしいが。

「よし、大体の荷物はこれでいいかなあ」

「ああ。——まあ多少の忘れ物があったとしても、現地で調達できるだろう。住所からして町が近そうだ」

「うん。お土産買ってくるから！ 良いところだったら、今度二人で写生旅行にでも行こうね！」

「ふふ……、ああ。楽しみにしている」

ゴッホが貰った、と言う出張先のガイドブックを借りて机に広げて眺めていると、ベッドサイドに腰掛けたひまわりがいじいじと手遊びを始めた。彼が指を遊ばせている時は、決まって何か言葉に詰まっている時だ。

「どうかしたか？」

「……えっ、あ、いや、そろそろ寝ようかなって！」

「……」

「う、うー……つと」

あからさまに視線が泳ぐ。俺に嘘はもう通用しないぞ、と見
つめ続けていると、観念したように深いため息が返って来た。

「色々、心配しているように言っただけ、その……。一週間、
会えなくて寂しいって思ってるのは多分僕の方なんだ」

乾いた唇を、赤の綺麗な舌がぺろりと這って濡らしていく。

「だから、ゴーギャンといっぱい……。えっちしてから、行き
たいなあって」

細い腰が僅かに揺れて、小さくて柔らかな手がぎゅっと股の
間を握りしめている。真っ赤に上気した顔と潤んだ瞳が彷徨い
の果てに俺へ焦点を合わせ、トドメにことりと首が傾けられた。

「だめかなあ……」

（ダメなわけがあるか）

……と、喉まで出かかった即答を何とか押し殺す。まったく
ダメではないが、昼過ぎの出発とは言え今から致すのでは彼の
身体に結構な負担が残るだろう。一日を移動で費やすというな
ら尚更だ。

「俺は構わないが……。身体がつかなくなるんじゃないのか。
帰って来てからでも……」

「僕は大丈夫だよ……。頑丈だし、元気だから！」

「いや、しかしな」

平然を装っているが、今俺は理性とギリギリの死闘を繰り広
げている。ゴッホから夜を強請られることはそうそうある事で
はない。ただでさえ先ほど無垢を半ば騙す形で写真を撮ったと
いうのに、天からのチャンスが連続して来ると身構えてしまう。

「……さつきお風呂入ってる時、そういえば最近してないな
あって思ったら、すごくむずむずしてきて……。そんなことし
てる場合じゃないって水も浴びただけ、我慢、もうできそ

うにないんだ……」

「……ッ！」

俺が理性と火花を散らしている間に、気付けばゴッホが目の
前まで歩いてきていた。すどん、と腰を下ろし、くたびれたス
ウェット越しに柔らかい頬が太ももに乗る。

「ゴーギャン、一回だけ、おねがい……。依頼、頑張るから」
「……わかった」

考える前に口が了解を出していた。こんな愛らしいおねだり
を無下にするなんて、聖人であったとしても無理だろう。むし
ろ断るほうが重罪にされそうな勢いだ。

「えへへ、やった……。ありがと、ゴーギャン」

蕩けた笑顔を浮かべながら、小さい手が俺の股座に這ってい
く。むず痒い刺激に息を吞んでいると、あろうことか太ももに
預けられていた頬が続けて局部にすり寄ってきた。

「ごっ、ほ……。待て」

「いや……？」

「違う、嫌ではない、嫌ではないんだが……。目に毒、とい
うか」

「ッ、あ、ゴーギャン、すごい……。硬く、なってる？」

「ッ、そういう、ことだよ……。あんまり可愛い真似をして
くれるな」

予想の斜め上、どころか真上に行く恋人の姿に勘弁してくれ
と首を振る。机の上に投げ出していた手をぐっと握りしめた拍
子に、小指がかたんとカメラを揺らした。

（……いや、ダメだ。いくらこの光景を留めたいからって、
それは……。それは駄目だろ）

カメラの中に納まったフィルムには、あと数コマの空気があ

る。ゴッホのあられもない姿を収めたい、という素直な欲求が、下半身の息子と同じスピードで首をもたげはじめていた。

（いや、でも暗室を使うのはミユシヤくらいのもので、引き伸ばし機は一台。俺が使いたいと言えば恐らく空けてくれるだろう。数枚秘密を焼いたところで誰にもばれないんじゃないや……）この手の悪魔のささやきに、天使が勝ったためしがない。溜った唾液をぐくりと飲みこむころには、俺の手はカメラに指をかけていた。同時に、ゴッホの唇が布越しに性器を食んでくる。

「ッ、く」

「……んー、む、んう、ん」

ゴッホの性知識はとても乏しい。こうした触れ合いをするのも俺が初めてだという。だが天性の世話焼きの性がそうさせるのか、驚くほど積極的な奉仕を見せることがある。心臓にも息子にも悪いのだが、想いの詰まった愛撫はどんな快樂よりも中毒性がある。

「あ、ん、ゴーギヤ……今、撮った……？」

荒く鳴り始めた吐息に混ざり、ぱしや、シャッター音が響く。

下半身に夢中だったゴッホが、潤んだ目を上向かせた。

「心配するな、誰にも見せない」

「ほんと……？」

「俺の独占欲を甘く見るな」

前髪を止めるピンを外し、隠れた額から髪をかき上げて乱す。

西日に照らされた赤い海が波立っているようだ。

（本当なら、泊まり込みの仕事だって駄々をこねてやめさせたいくらいだ）

「ん……、ホントに見せない……？」

「ああ……ッ、おい、ゴッホ……もう少し、ゆっくり」

「んー、むう、は、あ、は……、おつきくなってきた……」

ふに、ふに、トリズミカルにスウェットを食んでいた小さな口が、成長する楔に耐えられなくなつて口を外す。

「……脱ぐから、お前も」

「うん……」

そつとゴッホを退けて立ちあがり、遠慮も恥じらいもなく、纏っていた服を全て取り去る。ゆっくりボタンに手をかけているゴッホを手持無沙汰に眺めていると、黄緑色の光がゆらりと上に向いた。

「ゴーギヤン、手伝って」

ゴッホはこういう時、その先に待ち受ける情事に緊張して上手く手が動かせなくなるのだ。何度もボタンホールをひっかけでは、結局こちらに助けを求めてくる。

「ああ、じゃあベッドに……な」

よろけている少年を支えながら立ちあがらせる。ズボンと下着だけは先に脱がせ、上着だけが中途半端に引っかけた状態で柔らかなベッドの上へ連れ去った。

（……これはこれで、美しいな）

透明感がありながら健康的な肌は元来美しい。全てを取り去つて見惚れたという気持ちもあるが、僅かに衣服が残る臨場感もまた違った艶やかさがあつた。

「あ、ゴーギヤ、はずかしいよ……、またとつたでしょ……」

「すまない、どうも絵筆とシャッターは似ているから……」

心が動いた瞬間手に取りたくなる」

「もう……」

拗ねたように頬を膨らます恋人にキスを落とす。いつもの子供だましではない、大人の濃密な口づけだ。おっかなびっくり

に蛇を受け容れた口内が、戸惑い一つも躊躇に喜び絡みついてくる。

「んんう、は、ごーぎや、ぬが、せてよ……、あつい……」

「……上、このままじゃダメか」

「なんで……?」

「綺麗なんだ、捻じれて皺が寄って、お前と同じように乱れているのが。明日着る服は……無ければ貸す」

「……ん……、ゴーギャンがしたいなら、いいよ」

許しを貰い、柔らかなシートに一旦カメラを置く。すっかり手に馴染んだ少し高い体温を撫でながら、彼のいいところを思い出しながら辿っていった。

「あ、は、ごーぎや、もつとしっかり、触って……」

「淡く触れられるの、好きだろ。境目が曖昧になるような、じれったい方が……、ほら、胸も悦んでる」

「んあ、あ、やだ、はずかしいよ……」

シャツを押し上げるように、両胸の突起がふつくらと膨らみ始めていた。上から爪で擦りあげると、細い腰が打ち上げられた魚の様に小刻みに震える。

「ああ、あ、んんう……ッ」

「甘くていい声だ……」

「あ、ん、きこえ、ちやうよ……」

「皆寝てるだろ」

「そんな、絶対起きてるよ、ここみんな夜更かしなんだから……」

「……それもそうか。じゃあ……」

ぐ、と腰を折って、寝かせたゴッホの上に覆いかぶさる。体重をかけない様に体重を支えつつ、愛らしく鳴く口をそつと塞

いだ。

「あふ、う……、ん、っ、ん、ん、うう」

「ん……」

「ふう、ふうう……っ、んふあ、あ、んッ、っ、んーッ……!」
声が出せない分、身体が素直になっていく。胸ばかりを弄られていたゴッホの腰が、俺の膨らんだ股間へと擦りつけられ、熱と熱がぶつかり合った。

「ッ、ん……ッ、ん」

「んんう、ッ、んんう、んー、ッ、ふっ、んっ、んんう……」
早く触ってくれ、と潤んだ瞳に急かされて、二つの竿を一緒にくたに握りしめた。瞬間、繋がっていた唇が離れる。

「ふはっ、あ、ああッ……んふ、んっ、ううーッ……」

ひと際高い声が上がリ、我に返ったのか強く唇が噛み締められる。

「ゴッホ、血が出てしまうから……、噛むな」

「んあ、あ、だつて、きこえちや、う、つて、さつき、あは、あ、やだ、やだよ、きもちいい……ッ!」

「いやか? いつでもやめてやれるが」

「ちが、うよ、そうじゃなくて、あつ、んん、いい、いいの、いいけど……ッ、いや、あ……ッ」

快楽と理性との間で、脳味噌がかき混ぜられているのだろう。あまり意地悪くしているとあとで機嫌を損ねそうだ。

「ああ、わかってる。気持ちよすぎるのは——怖いな」

「あ、あ、ごーぎや、も、でちやう、よ」

「いいぞ、イって」

「や、それはやだ、ごーぎやんといっしょがいい、あ、あ!」
「俺もいくから」

「ちがう、ちがくて、なか、ここに、ぎゅうってしたままが、いい……」

ぱか、と太もが開き、ひくひくと震える蜜壺が露わになる。

「ね、ごーぎゃ、おねが、い」

「……ッ、ふ、う……、は……ッ、お前は、本当に」

溜息を吐いた俺に、ゴッホがびくりと身を強張らせる。呆れているわけではないと安心させてやりたかったが、今は言い訳の一秒ですら惜しい。ベッドサイドに隠した潤滑油をかつさらい、量の加減もなくぶちまけた。

「ッ、つめ、た」

「ああ、わるい、でももう、熱くなるから」

「あつ、ひや、あ、ゴーギヤ……ッ、はい、つて……!」

「まだ指だ、足りないだろ?」

普段の質量とは比べ物にならない細い異物を、思い切り粘膜が締め付ける。キツく狭い内壁をかき分けるように指を滑らせると、重ねた夜を思い出すようにじわじわと解れて行った。

「二本……」

「あ、あ、う……ッ」

「三本……いけるな?」

「ああ、や、ひろがつて、る、んあ、あ……ッ」

ゴッホが身を振る度、纏ったシャツがよれてくしやくしやになつていく。元々男の身体は興奮が目に見えやすいが、感じる悦楽が目に見える形になるのはいいものだ。震える愛らしい性器も、乱れる布も、奥底にある炎を激しく焚きつけていく。

「ゴーギャン、も、もう、ほんとに、げんか……ッ」

「……キツくないか? 痛いかもしれない」

「ないよ、覚えてる、から、だいじよぶ……だから……ッ、

あ、っは、ね……、はやく……」

「ッ、だから、そう、煽るな……」

ビキッ、と音が立ちそうな勢いで性器に血管が浮いた。ゴッホの性器からも、とろりとろりと先走りが零れ始めている。お互いもう長くは持ちそうにない。

「ふ……ッ、ふ……、はい、るぞ」

ひたりと蜜壺に口をつけ、宣言をするや否や許しを貰うことなく腰を押し進める。我慢ができないのは俺も同じことだった。

「が、あッ……ッ、んぐ、ん、あ、あ……ッ!」

「ッ、う、つく、……う……!」

弓なりにしなつた腰が浮き、貫いた楔がこれでもかと締めあげられる。腹の間でそそり立つ性器からは相変わらず先走りが蕩けているだけだが、この様子だと絶頂は迎えているだろう。

「あは、は、ゴッホ……ッ、大丈夫、か?」

「んう、あ、っは、っはあ、あ、う、う……、あ、だい、

ひよぶ、ごーぎゃ……、きもちいい……?」

「ッ、こら」

焦点のブレた目がぼんやりと笑う。そのままゆさゆさと腰を揺さぶられ、咄嗟に奥歯を噛み締めた。

「あは、あ、ごーぎゃ、きもちいい、きもちいい、ね……」

「ッ、ああ、すごい……、本当にお前には勝てないよ……」

「すき……、すきだよゴーギャン……」

「……ああ、もう……すまない、ゴッホ、限界だ」

「え……?」

ブツンッ、と盛大な音を立てて、僅かに繋がっていた糸のような理性が切れる。細い腰を両手でひつつかみ、欲望の赴くまま余韻にひくつく内壁を穿った。

「——ッ！ あ、……ッ、……あ！」

「ふ、う、あ……ッ、ゴッホ、俺を、受け止めて、くれ」

「あ、あッ、すご、すごい、ふかいよ……お……！ ひつ、

あ、ひやあつ、ん、や、ごーぎや、なんかくる、きちや……あ、あ……ッ！」

「ッ、イク、出す、から」

「んああ、あ、や、あああッ！」

「ッうつ、あ、は……ッ……あ、っは……、は、はあ……ッ！」

お互いの身体が一瞬震え、圧倒的な解放感に力が抜けていく。ゴッホを潰さない様になんとか体勢を保ち上体を起こしたが、荒れに荒れた呼吸はしばらく整いそうにない。

（今、撮っても、ブレるんだろうが……、それもいい写真かもしれない）

余韻を引きずったまま、放り出されていたカメラを構える。これが最後の一枚だ。身を乗り出し、顔を覆い隠しているゴッホの腕を退ける。

「ゴッホ」

「ん……、ゴーギヤ……」

熱に溶けた瞳がこちらを見つめ、幸せそうに笑う。ぱしや、と音を鳴らしたものの、ボタン一つを押す指先ですら震えている状態だ。綺麗には撮れていないだろう。

「満足、したか……？」

「うん……。ゴーギヤンも、それ、いっぱいになった……？」

「ああ。……宝物が増えそうだ」

「へへ……、なら、よかった……」

今にも寝そうな弱弱しい声が、段々と寝息に変わっていく。（……綺麗に、してやらないとな。服も人目のないうちにあ

らって、……俺の服を着せて送り出したら、どんな顔するだろう。恥ずかしがるか……、いや、お守り代わりでいいかもしれない）

門外不出を心に決めた、秘密のフィルムを巻き上げて戻す。上手く撮れていればいいが、いつそのこと何も写っていないかもしれないかもしれない。

（カメラのレンズにさえ、嫉妬するのか俺は）

溜息を吐きながら、完全に寝入ってしまったゴッホの頬にキスをする。この体温が一週間傍にいないのは寂しいが、今夜の濃密な思い出は七日間をあっという間にしてくれることだろう。（……まず、洗濯だな）

重い腰をあげて、ひとまず服を纏う。身体に染みついたゴッホの香りに顔を緩めつつ、俺は寝静まった廊下に向けてそっと足音を殺しドアを開けるのだった。

おしまい！



とくべつな
制作会話が解放されました

ゴーギャン
好きだよっ

大好き!!

ゴッホ...

だからっ...
これからっ...
ずっとずっと♡♡

ああ、
一緒だ

ああ、
一緒だ